平成21年度
研究成果

名古屋都市センター研究成果

平成21年度の自主研究の概要をご紹介します。
なお、研究報告書は名古屋都市センターのまちづくりライブラリーで、
概要版はホームページでご覧いただけます。

http://www.nui.or.jp

NUIレポート

名古屋都市センター　調査課　井村 美里

1. 韓国まちづくり研究・清渓川再生プロジェクト

多くの人で賑わう清渓川

清渓川は2005年まで暗渠上に17万台もの車が行き交う道路でしたが、今は緑と水と生態系が復元され、多くの市民で賑わう川に戻っています。この成功は国内外の河川復元の契機となると同時にソウルの街を公共交通中心の交通体系に改善し、車中心の都心空間が人中心に大きく切り替わるきっかけにもなりました。

市技術系職員20名と共にこの清渓川再生プロジェクトを主軸に韓国のまちづくりを学ぶ研究会を設置し、昨年8月にはソウル市職員と直接意見交換するという活動の中で、都市魅力としての生きた水の意義、市民合意形成に対する職員の粘り強さなど、多くのことを学び、これからの名古屋の街を考える機会になりました。

2. 緑ある快適な都心空間のあり方研究 ～「街園都市・名古屋」の提案～

名古屋都心部は道路・公園率が40%を超える程都市基盤が充実し、その形や使い方は400年の歴史の中で時代の要求に応え少しずつ変化しています。先人達がしてきたように今、これから先の100年を見据えた提案が必要です。そこで将来あるべき姿を議論し、視覚的に表現することで人々にその良さや必要性が強く認識されると考え、交通・土地利用・緑化・デザインの専門家による研究会で将来都市に必要な要素の提案、あるべき姿の模索、主要地区の将来像を議論し、「道のまち・名古屋」のインパクトある発信として①自動車利用優先から人優先に。緑化の充実により街園化をすすめ緑の中の都市を実現、②400年の歴史を継承する歴史文化の香る空間作り、の2つの視点によって『街園都市・名古屋』の提案をしました。

市民研究Ⅰ（共同研究部門）

研究テーマ

まちの身近な緑と市民の関わり方について考える

横井健一、蟹江治恵、加藤好雄、中村俊雄、河村幸宏

名古屋市においては、平成17年3月に「緑のまちづくり条例」を制定し、緑の保全や創出に取り組んでいますが、平成17年の緑被率が平成2年に比べて5ポイント減少するなど、緑の減少が続いています。本研究は、名古屋市民として、身近な緑をいかに守り、増やしていくかという視点で、地域に根ざした研究を心掛け、既成概念にとらわれることなく議論を深めました。

現地調査やヒアリングなどを通して名古屋市の緑に関する現状と課題を把握・分析しながら、最終的には、①緑を減少させないための施策、②緑を増やすための施策、③市民等との協働による緑のまちづくり、に関する提言をまとめました。

市民研究Ⅱ（自由研究部門）

研究テーマ

色彩を通してみる都市環境と都市文化

ながなわ久子、木村晃一、加藤裕之、熊田秀子、荏原温子、佐良木美保子、西田智恵子、千葉順子、鈴木博正

本研究では、名古屋の都市景観を良好なものとすることを目的に、環境（ハード面）や文化（ソフト面）を“色彩”を軸として調査・研究を実施し、持続可能な美しい都市にするための景観提案を行いました。

私たちは「まちのいろが感じられない」ことを課題として捉え、「まちのいろ」とは何か?をキーワードに、①測色調査（ハード面）②アンケート調査（ソフト面）を実施、良好な景観を保つには“見えるいろ”［環境］内のバランスだけでなく、“見えないいろ”［文化］とのバランスも重要であるとの知見から、以下の通り、景観構成手法に関する提案を行いました。

提案①:エリアカラーを表現する
（［環境］〈ハード〉と［文化］〈ソフト〉のバランス）

提案②:景観要素の色彩提案
（［環境］〈ハード〉内のバランス）